

氏名(本籍)	まつ 松	お 尾	まさ 昌	ひこ 彦(茨城県)
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博乙第1744号			
学位授与年月日	平成13年6月30日			
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当			
審査研究科	歴史・人類学研究科			
学位論文題目	東国古代政治史の考古学的研究			
主査	筑波大学教授	文学博士	川西宏幸	
副査	筑波大学教授	博士(文学)	山本隆志	
副査	筑波大学助教授		前田潮	
副査	専修大学教授	博士(文学)	土生田純之	

論文の内容の要旨

本論文は、古代国家体制の形成過程を古墳時代のなかで扱ったもので、序章・終章を含めた7章と、参照図版と参考文献から構成されている。

序章「古墳時代研究の現状と課題」では、第2次世界大戦後の古墳時代国家形成史に関する論説が検討され、国家概念の相違だけにとどまらず、領域支配を立証する地域研究が不足していることが指摘される。そうしてその研究の実践の場を、大化改新政府のもとで重視された東国に求める。つまり、古墳時代における国家形成過程を、畿内からでなく、東国から照射しようとする本論文の視座が本章で示される。

第1章「古本時代前期首長の性格」では、銅鏃の少数副葬例に着目し、武器・武具の伴出例が多いことを指摘する。ところが、碧玉製腕飾類は銅鏃とならんで前期を代表する副葬品目でありながら、武器・武具との伴出例が乏しい。このことに着目して、古墳時代前期には、同鏃の副葬に象徴される武人的首長と、碧玉製腕飾類の副葬に象徴される司祭者的首長とが分立し、両者あい携えて地方経営を行うという構図が描かれる。さらにまた、銅鏃の少数副葬例が岐阜県以東の東国に集中し、かつ前方後円墳や東海系土器の掘り方と一致することから、前期において東国はすでに首長権の分掌にみられるような、また銅鏃という儀仗的武器に強く傾斜するような独自性をそなえていたとみる。

第2章「武蔵における古墳時代文化の流入経路」では、東国の武蔵地域をとりあげ、その古墳時代前期ないし中期における文化の流入経路を明らかにする。すなわち、東海西部系の土器が相模湾岸ないし千葉県北部の東京湾岸に分布し、かつ古利根川・荒川下流域の低地帯に及んでいることを指摘し、この東遷が太平洋岸伝いに東京湾岸に至り、古利根川・荒川低地帯沿いに内陸に達したとみる。これは、多孔銅鏃のような他の東海系文物や、北陸系土器ならびに畿内系土器の東遷ルートでもある。ところが古墳時代中期に入ると、古式須恵器や初期竈の分布が、武蔵地域北西部の児玉郡域から本庄市域に集中するという変化がみとめられる。この変化は、武蔵地域への主要な東遷ルートが、5世紀中葉を境に変化し、南回りから、古東山道を経由する北回りへと重点が移ったことを意味する。

第3章「科野における古墳時代文化の動態」では、この古東山道ルートにあたる科野(シナノ)をあらためてとりあげる。その結果、同地における前方後円墳の造営が、4世紀前葉から5世紀前葉の段階は善光寺平と

いう狭い地域のなかで展開するのに対し、5世紀中葉ないし6世紀中葉は下伊那に中心をおくこと、そして6世紀中葉以降、この下伊那の集中域は解消し、かつ馬具や装飾付大刀も科野全域に分布が拡散することが明らかにされる。この一連の変化はヤマト王権による地方経営と関連するものであり、善光寺平を重視する点的経営から、5世紀中葉を境に、古東山道が通過する下伊那地域を核として地域を繋ぐ線重視の経営へ、そして6世紀中葉以降は面的経営に移ったことが述べられる。

第4章「総における地方経営と地域間交流」は、この科野の結果をふまえて海道沿いの総（上総・下総）を場にして、6世紀中葉以降の変化が分析される。まず総地域の馬具分布の集中域が、6世紀前葉までは東京湾岸と香取海圏との南北に二分されていたのに対し、6世紀中葉以降は、両域の中間地帯に分布を拡げ、千葉県域を広く帯状に縦貫する分布を呈するようになること、次に上総と北武蔵とを結ぶ交流が6世紀後葉以降活発になった形跡が、石材や埴輪の移動から知られることを指摘する。そのうえで、総地域縦貫ルートはヤマト王権による東国経営に深く関わり、北武蔵・上総の結びつきは在地の地域間交流の活発化を示すとみる。

第5章「古墳時代東国経営の緒段階」では、上記の考察の立脚し、かつ短甲分布の変化などの新たな事実を加えながら、ヤマト王権が関東地方で展開した地方経営の画期を抽出し、その歴史的意味を述べる。まず第一の画期では古墳時代開始時であり、東国が独自性を有するがゆえに、貫徹度の低い経営にとどまった。第二の画期は、短甲を有する中小古墳被葬者が急増し始める5世紀中葉であり、中小首長が王権の軍事機構に組み込まれていった。そして第三の画期である6世紀中葉には、挂甲分布の拡大によって、軍事組織を王権に直結させる機構が整備された。

終章「総括と展望」では、本論文を総括し、律令国家を展望する。武蔵と下総の国府の設置場所の検討から、王権による東国経営の施策が律令体制したにも影響を残した可能性を説き、また、9世紀以降、集落と官衙の結びつきが強くなり、東国の地域色が再び顕在化したことを、墨書土器をとりあげて指摘する。

審査の結果の要旨

本論文は、国家形成に能動的役割を果たした畿内のヤマト王権からではなく、東国といういわば地域の視座から、地方経営の実態と変遷の諸段階を埋蔵資料の的確な整理を通して究明した点で評価される。

すなわち、古墳時代前期には、武人的性格と司祭的性格の二者の首長が分立し、とりわけ東国が武人的・儀仗的性格に傾斜する独自性を保持していたという指摘は、後代に東国が軍事動員の地として重視され、ひいては武士団の形成にまで至ったことを考えると、東国の基層の一端がすでに古墳時代前期に胚胎していたことを明らかにした点で重要な意味をもつ。

第二に、東遷ルートが、古墳時代中期中葉すなわち5世紀中葉に、太平洋岸を経る南回りから内陸の古東山道を経る北回りへと変更され、それとともに、東国の中小首長が王権の軍事機構に組み込まれていったことを述べるが、この論述は、5世紀中葉という古代国家形成上の重要な転換期を、交通路の変更の面から跡付けたものとして評価される。

第三に、6世紀中葉の画期について、科野で交通路掌握の線的経営から面的経営に転換したこと、関東では、総地域の内陸を南北に縦断して東京湾岸と常陸とを結ぶ広い帯状の経営路が成立するとともに、北武蔵と上総を繋ぐ在地首長間の交流が活発化し、両者あいまって軍事組織を中央に直結させる機構が整備をみたことが明らかにされる。この論述は、家父長家族の台頭や組織化を重視してきた古墳時代後期研究に新たな視点を導き、再考を促したものである。

本論文では、埋蔵資料を駆使したきめ細かい議論が行われているが、それゆえになお問題点も残されている。その第一は、古墳時代前期の4世紀に東国が独自性を保持していたことを説くが、5・6世紀についてはヤマ

ト王権による地方経営の進捗ぶりが語られ、東国から照射するという視座がいくぶん弱い点である。第二は、表題に政治史とうたっているが、交通・経営路の設定や軍事上の編成に叙述の力点がおかれ、地域変容に関するソシオポリティカルな視点が若干弱い点である。第三は、重要なキーワードとして、経営、点的、線的、面的などの用語が頻用されるが、その吟味にやや欠ける点がある。

このような問題点はあるが、膨大な考古学上の資料に立脚して、東国全域で展開された長期に及ぶ地方経営の実態・変遷を復原し、かつ律令体制の成立までを展望した論述ぶりは、現在はこの方面の研究水準を越えるものとして高く評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。